扶桑拾葉集

十四下

規

太政官文庫
和書門
類
號
函
架
冊

内閣文庫
和書
類
號
冊
架

内閣文庫
番號	和 32041
冊數	33(17)
函號	204 146

共卅三

扶桑拾葉集巻第十四下

目録

さゝれ葉の日記　後福光園院摂政
雲井乃みのり　同
愚問賢註序　同
都のつと跋　同
白鷺記　同
いゝ代祢さ紀　同
筑波集序　同

扶桑拾葉集巻第十四下

さかき葉の日記

後福光園院摂政

みやこの京極白かはの里さかひはまのとてり志けれ
よしさてとし經そうる翁侍り當初あ三蓋
いはそもの心よもちにて齢小の旅すこかせ聞く
むかしこれ代々をすむ庵にいつと三ゝ奈良の
都の名にや故郷はゆかしきそとに物さひしきを
當りおとしこの冬はふるとも御禊ありけり
からうつ替へは辞にすませ行はれ御山をも
梢の月いとをかしくみえて林ならぬ

ましま康忠の殺害ありしもちゝ水の都にすてゝしと年
く帳のかなうるし時なりしかるまゝや此者の法ハ世の中
の人みなかくろへておて人をも首尾しさかりしかのま
しのハ仏有さまくるひハ此れにそろいてありやうそ歎き
給し康の坏なりし道人詠よらるかい又同じ鼻し
すれ頭六條殿をも庭ありしもいりかくしよふま少しもな
く狀しなきとそし事誠不思儀なりし事にや
大方神々の御心も人よそろへぬ事にて御と
抑此者白御神ハいちゝやくそろゝ所ありける
ともあくなとし給事なるをもかくし首より
神龜ありそうゐわるものはかりよ積をねてな
き事よゝ多くありけるこそやさしけれハ任治ありし大覚
寺の法皇の御榊をとゞめられさせたまひけり是も
給ひし秋しに走もゐ綸宣ありて不思儀の
奇特ともありしよしやとて身枯なくして
其験をたまりつるこそや今しいかなる事か侍らむ
まゐらせし世もゐ人いや御しに道助禅門の事今
白明日かゝる事あるへしこハ思ひもかけ給ふやいか
ありしあるへしありけるかく申難きこと申し侍
まやこ世うあるにさいはひあはれハさしてさりや
ひとたびみかえて御の此所も老の坂くらし此道に
そそらはへさいはひ長講堂へ帰りてありし

よるへいせの旅のとまるおもしろかりしを侍りし
にほひに濃しとさへつゝめかゝせいほしとむ社
ふりあはいとゆかしかりしにふるきあはれなりける
しにあはれさくたえての古寺のあれはてしこや柵
秋くれはあの月さしいのよしもかせのこの夜半すきて
野草生ひしけりてこかけしのにあるも庭はあさし
ちぬるとよいの虫の音所ににさこゑしめたえし
嵯峨野宮の嫁もむかしの物の形しきりくるはかと
所かしこへあはれなる物もちそしてかちくはの
様なりしかほともおかしみかりたる物なきかりいてむ
神司の四人十人はかり所さかりゆ秋なる
あはれやりしにさきむしのなくかはかりにさまなき
の旅所にあまる神のいかにいそにも此二年叶事
なしいはぬ人も欲いの世のためのものにさらに
もみなかみ伝へき此みかと南都の堂のなかるまし
よ侍るいのりの事伝しきやうあらはいつ事あ
うやういよしあはしなさしへいつしくけさにや合
そうりしつをとしてはなしかしもしなかはかね
の誓にかりきれても一夜の中部のさえ
きらしかりよりしいさうの解纜なしに事も
あとてかりの祈祷して後は残なく間開
如何すて八月十二日むかし帰居こそせにして因

出家事ともありしかと仰ありけれハ雨ハ天にもる
よそよりをさこそ思しけれ胸の中かくしてまかり
なりぬ簾もぬこりたる心にし給ひしまへ二三日
のかくハ流徒神人へ三万人も命しよとてのま
当道しさうともへせんとを白す候ねまハ祇
中ゆもとりうちて物うくりのあやしぬさハ当
公人おさめうるハそちこしゐるやりもしまうてな
とそうしまさく六条坊へとりし当流徒少しも
六条院と集会所よりしてありけるを乗ねわ
当ありていかにおほしけり弘安五和よもと
りくニ承ありしかと祇の神輿を給ふ條らくを

ふとにめくらゆくニ晴そうりしか今日もさにに
あらいむもう給ふと来て論あうり人ハ申仰し
公卿着座して装束もうりてハかあらりて
ふこさハれもし命当事かやこうりしき雨ことに
神過といとうらくそおほき仰し辰時よ当
曹弁嗣房奉行へハ参して事うてありとを神
人流徒やうく集来く六條坊の庭よりあ六
七町ハ公しこをこゐとうり已時了権別当
懐雅権僧正を勅使として僧綱三口十人参り
并東乃庭の北方よさうやり両流徒ハ東乃方に
立満ちそうり已時ハあり関白殿家司神司の

輩なりし皆門前へ来合ハまなく事なくとけ
御先當上への那らせ給嗣房ニて除く以下
納乃中なり大家院傳奏以房とそこし
てよきかハ人をりかハさる午時ちわたり右
大臣殿九條殿一條大納言殿別當すし次才
まく東乃庭もむ南乃方の公卿座なり清く
やうく事なりとねまハ関白殿座よりかせ給ふ奈
良乃僧綱已下庭乃前より下く座れをいふと
られ内ものも長者乃験よや大臣以下座ハ具之齋
乃座一帖也執柄もむ附座ハ二座重ねりしれし
長者乃まちかりやうろそて給し此殿ハ暦庭

すりし内大臣まて傳奏なるか又もと度當職よ
御中出法よりの事ハとありかうしふ不意なり
うやかしこき後大家院乃僧初集せ給ふ上童
まとさうらしくこゝろ出附もむ胡なり係る
祈後僉議乃事なり神許悉眉を開く上関
白以下氏ものも人々神行なりきをみて吾神
乃威光よにとなり朝家も武運も長久なる
事へ三鎚せられ一円にこ後楽人北ものも方
よりむすらく乱声なり神人数百人来
御先布箇を出しそをくまつる布箇の神
寳東乃それしもを下ねるを関白以下もむ人々

庭乃前より下てこれなさ國隨て布留をもちさせ
給て後於社乃御榊又所々の正祢宜さ物
抔神官らし後西して侍奉此時楽人還城
楽を奏して警蹕乃声にかうくして関白以下
僧侶ともに首をたれ手伏して中門の
辺りにてそれ時公卿於もて猶て庭より苦
く次第り神行にしてその御うちもて行
列して行也同事も升堂此度さとなし給し
やうを詳しもなりと
先赤仕丁二行に数十人白杖をとりて前行を
次白人おもて神人数百人榊の枝をとりて次布留

まも大明神乃神宝とり神人数百人相随次又
黄衣乃神人数百人あり次以正祢宜神司こし
未帯をとなし後西とそなして物さそまゐる
神人数百人随ひてまつる楽人道行の楽を
奏して供奉次関白殿柳の以下襲しり絲
鞋をとなし給随身十人以さらくをいれ神行
よ恐らくまつりをもち左之殿上人二人一人は御裾
をとりて前駈四人以後よあり次右大臣殿清蔭
長殿上人一人前駈二人すもて次今出川大納言次
花山院大納言行粧きらくしくたぐへ行て次
九条大納言殿一條大納言殿次坊城中納言次

四條中納言の次別當例事なりし侍從人々なとなと
くらし給ふ國ありけるに次西園寺中納言の次四條宰
相次洞院宰相中將此後は殿上人にてなりしを
忠頼朝臣關白殿御猶子取季村朝臣左大臣殿
の御侍なり親忠朝臣關白殿の御侍嗣房
朝臣南曹基信朝臣一條大納言殿の御侍宣方資
康仲光宗顯為有蔭時九条大納言殿御侍は
あるに次聖信次權別當已下僧綱大家院僧都の
房も此内より給ふ御沙汰ゆるしけるそ名無給
〻次流後一二万人螺を吹連ねて充満せり
さしかる事色なれ物ともなきとし石も多

さし給ふらしなさはとにもかくにもく
例もしくされしこれは流後のさきまれける振
舞なりはや車はみなそろへなる例しもの例も
御進うてふみかへらしねまするもの沙汰有て
今度も使廳より御けしきにも有りく
車二三両みなもくつりゆくと流後なくにうち
破りけると申ししは伊の有る人もそうか御りの
いふ使ありまさかり侍奉の公卿の人数も
と前くもあるとなすへき事無御しかとも先程
しけくそ此時まて公家の人々出立わなさるそ例
の物ある者もしいひしし申内にありまかせしそ

晴て榊よりはかり白毫香来山の代まて鏡し
されたりあかりけれはさりこさしいかにおもひなし
神人たちの鬢髪のかみかゝりて御輿をすゝめ
あさやかなるとふ幣なとの時はなそらく両
のかよひ秋いそことはなく青こそ秋ろ榊の
梢くもりくもらさしの枯れのゆらしてまうつく
身のかよきさしのやうしそ見て給しれこちれ
うしの楽の声くあやしれさのまたゆめまそし
なくことおもしのは都よあてしきこゝのまゆを
むしろかそと白いなこなし時の関白大臣
なとのかやうり人路をとさなうち歩をはまし

あつとなるいとゆりらこひにてまや此度は院まて御
ましにしなくこ事いとはかりくしてうきしけり
将軍六條よりありに様なとと稀くみ物し給
しかいの人々ともいさしつむしてそなりしし物
のなる色行らなちし事いよく目出なるか
し事なき白のやうに事ゆへなくや沙汰
せしめ事武運なれはさかりしく給なとそ例
のうれしねこゝ事どもにつし給し此前も道に
道なとさのつてと朝卯刻より六条坊よまかりしけ
いとくろしとて陽戸の方に立つて息こ給し
にごし九十いかりとにおりや成ねんとみかゆか神人

又寺官なりしにもやあらんここゆゑ法師ならん是
し八十所まつりたまふこの地鎮としたまひしそれハ当
社乃北事乃首にあらはるゝ事なくしてそむかう給
しろくもみかみまそにあひいはゆるもの給ひけるに
らしておろかに事付給ひし寺官乃俸ゆ候此春日
大明神乃北乃事を兵神ハ何も同事ニ以乃よ
ふかに返くを無念に給ひ是を日本上にハ当社もち御
成敗ありし事ありけれハ給つ侍るなれハ伊勢太神又
正八幡春日大明神此三社乃帝王にも人なき
をしも逆らひとえらるゝ世給事ありけれハ有也八幡
大菩薩ハ應神天皇ありけれハまつらせ給へハ人王

そくら乃后に神と現し給ひ此草原中津国と立
ちま事ハ伊勢春日乃北沙汰にくはしくあり
昔天上に在る産霊尊ことむ神にまつらせ給ふ此
神ハ国土へいくらうちかねりて兵天上より前
事といふうちまねりしせる神天照太神乃北孫
皇孫をぞ居しまゐらせられて此あめつちの国へ
天くだらせまゐらし内天照太神もそれ内ハ天上に
ましまし前御孫乃神まて三種乃宝を授まゐらし
なかの八咫鏡 是ハ内侍所也 八坂曲玉 是ハ璽箱なりと 草薙剱 是ハ宝剱なりと
此三種を授まゐらして天児屋根命を副奉
て筑紫乃日向国なる千穂峯に天くだりまゐらし

されば此天児屋根命と神代のむかしよりもちて歌
は日のもとにしてもろ〳〵海の底は地のこ
ぞらしてもろ〳〵天照太神賢く誓ての詞も四
いく我子孫は此葦原中津国の主となるへ
し汝の子孫は代々国柄を執て康とすべし
殿を等くし二神助を同じくして神約ありて
もろともに君臣の契ある事なく魚と水とに
異ならず風と雲との感ずるに似たり上代
守君を補佐したまへるは是也あつまれし
鎌足今の春日の二の殿まで代々朝執柄家
の時先祖そうしたはしは代は末にありつれども

伊勢太神宮の皇孫を守る人の位に即事は
一度もなし又春日の神孫を当人の執柄に
成事とかくれは世にあれとも神国のいふかし身
験をあらはせば我唐国にはいかなるいやしき身
伊そやとも蒙古帝位をつぎて王位に即
侍りのつねなる人の約束にも遠事はなし
ましての神と神との誓約天地とひとしかる危
きせさればわが国の賢王賢臣の代をもひとつくれ
先ていかでか不可思議の礼で退くまじ
も偏に春日大明神の御事にて二神約しそ
し継命右大臣寿永にて宝剣西海に沈て後

法皆にみかやとまし武の御守と成て國胡欽
をとゞめ給ひし動して先治義四年に義
兵をとめとゞまりしかさま神文により尉をよせ
たまひし後所形成親の為め大和國一王をさ
めらし地域といへともまへもし年吾白社なり
寧進をうけ神しうらむ神代の事とかくしまへ
給ふをかゝみられけるすゝへし八幡し吾白し
正書の頭よやごろんごらうひゝ給へい能國をとゝめ
らきん人をそ給ふまらひく守ゟさろへき大方
聖人なりといふもの濟い中くゞたりをとりしれ
賢人なりといはれ給ふもの人までも所名利欲先に

さる事はなれども人を先らして己をなをし
給ふ志深かりしむかりは立所に國しおさめり民の
慈しみましまはれは給ふまたをとへは佛の出世
し給ふ諸衆生をおかれこれも同事なるへ
しされは釋迦の所説もり所滅度の後僞
濁悪世ノ大神と成て衆生を導くへし
ご給文もかやうにやすて七事とせりなめりて
いまく給ふし古は人のかゝあり給へしなりけるに
吾白天明神は本地毘盧并もをとめたるを
へい人を助け給ふ慈悲も深かるへし氏蹟右大臣
所の信仰ありく自しもしゐて知ろろしもその何か

此神は神遠よりおはしまして天下をしろし草創し
給ひけりやごとなきおはしませば秋には不思議
あり給ふとさへ聞くしるしは給ひしと老の心
物とする秋のあはれなる事も多給ふ
んあるまじき神人は雑人をいかにせし
のまくらはらのまくせしかはらりかゝりてもれ
そゝろしくてやそ立出給ひしかはあはれなり
おのく給ひへし

亀井の水のこと　　同

かゝる山陰に年経たる古居ありそこに聞く人の
身はかうしらく清井あり死ぬは文古にかゝ
聞けにもいとゝむかしおもひて蛸は杖ありとも
ありかしこくありし此勝月は大白に浮滅
ゑてありし苗そよわあらゝ屋どかゝりけるそら
よりしあるおりしく九字の中を見給ひ
ありといとくむまゝすり秋ふ老は膝に
かく聞つゝあらはゆゝへ屋に須いかとか
へつめし苑乃ありて島は都まりあるし

をりてはねまいこやのをまれてりいゑうこの庵
にほやこのありさま見えかうしいしんとあら
よけれはなり此二十年はかりは世中に
ところおさまりてとくはかねて御殊なく穏
波らしくしはしかりも秋津洲の浪風し
つかりもに壌をとりつ民まいか歌まうにも皆
まい賢王の御代なりとこそあらへり
かまれなりけりなるは嬉しきをまつれ君の
御世いうんしまた年万代をとこえていとめ
のりし給へぬそうは書ならは同くは九
重まい御かりに何かしは兄いそうとまかりし

んらく例まい草乃庵を立出て都まで
かゝりつけとまいり内裏へ参る所々みちゝ
いつちそと人へたつ同行へたり都にもとりんへ
らし百敷をとゝこけり七石のわかれけりまいい
しきりかに萬とし侍ゆりんに此まゝ年から
くてりしめさゝの矢しことりけりまいとそ
まれくかりくし年内裏へ入りいりけりさま
みりぬし陣まいあはあかりし人しりてしく所
とにまゝく立ちしへおくか馬車道しさうえ
あへむいあかりとにんもぬ何事そとうめ
への人たり尋ゆまいかとし舊院御七光

くはしくて二年大かたの御佛事也しあり
みとはしごりまいらせ正月十九日より御
殿にて年法華懺法七日はこなたも始
はじめすなはち後白河院の御世よりぞ保元の
比とは申し佛法を始めさせ給ひしかば仁壽
殿にて年七日御懺法ありけるに其後世々の
帝々此御つとめはたえずけるに建武の比をも
二季の彼岸にはじめをこなはせ給ひてや
舊院又遊安にて寶篋院の右大臣の御
佛事にて思召なぞらへてつかうまつらせ
し給ひしことなれば今くるゝの佳例あ

年をへにしとてはかなき事ありとよろこび
なかりしに二年法の世しるしあらはれ侍らん
しるべにてんば彼鷲の御山鶴の林やしに
もかはりあひがたきはじめをとらふる事のあ
給ふめと年老たる翁の玉のうてなにこそ
年ごろみえやりこそはやあらん心もおかまほし
すこやかしくとかゝりつる御つかう秋しさて在
かゝる翁のそゝぎわかれ二年心也
あつまさかは尋ねりしば給ひて
一樹の陰也契も此世ならぬ事なるべく
おぼえ給ひしに陣のかたよりゆるゆるとたち

弟人のよろこひみゝかへしとおほえよろしくしたれは
よろ御集りそと又こゝの前にようりね猶
くかれしとなさしや此御織法結縁ま
かめてける大将殿集ゝせさせかへ衛御
いきかひを首しいまいありかよろこ事に
なとられをれりこゝよろく申けるに及両
いとてし老まい思出てし弟も御ゆかしと之
是見の拭ふみゆてしまつる此所ともる御佛
ままいよろ別當殿乃御もと出よこにゆち
よろせおもひてやうねゝ由裏よさしてゝね
ゑ殿よ人し数をはくし弟三十人いうと

陳ゝ両つりむかみに酒身丸忍はしてりいろ
くもま侍衣ことてさせんのもとかられやかてりを
なちかし弟いと面白く前駆して又御太
刀に履もま役人かとりてやいろくまい侍衣
きてゆかし先しくせゝれけりあれいこし
やうゝ當らし御ありしれりこゝよろくまいり
等持院殿寶篋院殿いよろこひくゝ世乃乱よ
にこゝ語とのこはくらんし御しゝり此ね軍に
御代ゝりかなとて又白佩杖とありしされ十
白乃当壊ゑとりゆいらとれし人ゆかり
さね御身ゝこ八場もまかの唐玉もま貢くと

ゑそてよりふかきの事なりなとおもはめく
めきことよ及ふ給ひしことなりや殿上
のおよりものかし場そゑまへの人々これをかし
こもりとこいつれ入そくまいり菊はいまた
むかゐるなし御直衣刺貴の色相ふとなり
されやかなり御年のかて叱よりきこそいてい
三室なり近濤の人物あまりなりあまりて似合
そそのやうなり処見なりしとの與ちる
女房臺盤所まいらむかりて而三室て入ル
扇自をいよくとみねことうれいとゆうし
くさふみかへ申侍りし准后とそくまいる

らせそとまよみらこゝろ人々みかくしつまゐらす
殿の内ハあわかなり御気色ありなりや座らく
長衛菊所となり道場まいりのめへ鏡くり
て是れは議定所八間を堂りてまいるく御
しはしかありさりやのすゝれとそそれそ
さしまい御簾をまくく惜華鬘とのまいあ
いそり小の方八御簾まいらよ几座を段
らのりやまい几簾なりそねく畳をしれく
公卿の座とれ南の方なりおりしううみ
ともしそく僧達まい座とれ東受貢子に営
上の楽人の座ともしれそのまへまい庭なりふ

さしとほし二年比下まで伶人乃座らん梅
乃まかひもこえ乃うらなみありしなとりよ
吹送りける追風しあふしむかちそし給
し彼佛乃御迴向かきろせしかくへおいとこえた
そそうらく并れけしもよくていわそ荒無給し
尉源いつれまいこえ乃中に出御ありけり准后
右大将殿小乃方横座ありけり御世於ゐ攻中納言
資康乃口別當まけのりの口西乃方乃座よりて
道場しせるもおいは中らへ人数なしさんせ
し也良憲僧正長厳法印房淳法印良壽
僧都教円僧都心慧僧都名生ありけく

堂上乃樂人は御前大納言さまねとらの口 笛 今出
河大納言さまねうしんの口 琵琶 民部口入りらんの口
笙 室町前宰相公度 笛 室町前宰相中将もとあ
あらの口 箏 園前宰相りとりの口 琵琶 公清れ
皆入りしもおの口 笙 冷泉之位ありきとの口 そ攻中
将ちら雨さ乃頭名 笛 公科少将教冬頭名 笙 同新
少将乃のせらふの頭名 笛 楊梅入少将あおゐ 篳篥
地下の楽人は笙秀秋豊原秀秋同盛秋同統
縁同氏秋 篳篥は安倍季村同季英 笛は
大神景長同景秀おおしく景秀鞨鼓を
景継太鼓は安原安縁也 箏は篳中なり

加賀乃局今参乃局也人々着座の後以中将
ちかなか朝臣参りて御前の御簾をまき
かくまきて次に盤渉調乃てうしを
ふきては物乃音ともいと面白し末常
冠直衣にて殿上人としての役にて花籠
もとの花かこを掛て参り先佛前にハ
白河中将顕英朝臣是をもちて御前に参
以左中弁つねしけ朝臣掛て参りてなと准
后御前にもさゝくそのゝち准后にたまハるハ正
親町中将公仲朝臣是をもて右大将殿乃
まへハ洞院中将さねなの朝臣以中将也
まへハ四條中将たかすけの朝臣別当のまへハ月輪
少将季尹長賢法印下のまへハ敦冬朝臣房淳法
印下のまへのつきには朝臣良香僧都のまへハ雅氏
朝臣教恵僧都のまへハ左兵衛佐もとけ拍子
兼僧都のまへハ右兵衛権佐重定次に揔律
乃楽ハ宗明楽なりし次に伽陀ともいふなれ
かしらし次に登楽採桑老なりし次に又
伽陀あり次に調聲良憲僧正礼盤にの
ほりて之法讃あり萬秋楽乃序あり敬礼
をハりて准后右大将殿以下御礼拝あり
次に又楽万歳楽乃破六根さんハ二へんの

て楽一りん伽陀一りんなりし蘇合乃三の帖おも
しろく破急白柱つき物ぐしぬ都りそゝろく
あそひとはしてりし笙の笛次回盃乃楽輪
臺青海波なりし次て伽陀次て行道あ
りし准后座をたちてまいる二の御簾をかゝけさ
せ給ふ主上御引直衣緋の御大口に笙を取や
てかれ御こしを御らんしてありかなくなりに
なそしまいる比のこ御数珠をとりて誦給ふ
帝絶ものそらんあそいほそいとかゝしまれし
う御なとなりし准后右大将殿頭中納言
別當菊亭をかさねて備てありけるし行道し

給ふ帝内乃将軍にやうに行道せさせ給ふ梅
こし首しそを見しもくすに事あれは伊のに
おろかの御納受を御らんとそうしくれう
ことそくもつそ乃後ことれなえて海を
そまる又おの楽は竹林楽なりし回向乃後
楽千秋楽なりし伽陀なといふかく事ゆ
せ事て帝御まいらくしく志て御つき次
ますらくせ秋はをのく莫なそりし右大将
殿は常乃御所へわたらせ給ふ御前の御酒の
御土器そへしく見まいりて衣もあけりこよ
まうとせ典侍由御気くまきねこもこの比乃

梅桜てりかゝやき香もありありとなのめならず舞
御しはしはしやつとめくまりれ歌を伴ひ
絶えぬさまなり詠しもとの歌を作りしか
ば文あそび集へし道もありてらむかしいかなる殿
かうもの扉のやゆかしと尋ねて此しるしを覚ゆり
ゆふかけ
同二日梅日の日今日第二日也とのきしてこそ
をきぬるよりあわれにあつさ楽しみいはれし散
花も人々は雅親朝臣光長朝臣顕英朝臣
公仲朝臣季平朝臣教冬朝臣雅氏朝臣資
兼資藤重光兼俊等なりけり今宵も主上御

の道ありし應安てありしは中日結願なりとてありしこそせ
ぬまゝにしも此度は将軍御集の中へ入りて今
宵も御の道御かたと彼扉をもむかしかゝりし御ありし
いとまかなふ以事なりと入方菜摘あり汲つ
こめさせ給ふまゝに御子ら詠さしは舊院し御伴の
てりうせしくみさてもうしそのきまいらせつゝんと
添しもとさへのぬしをおのれと申しし今宵あ
動言いふや懺法なり人々も若庭先れにとし
なくの道は御はし
二月一日第三日なりと事のさしはしさし可
ゆかしる事をあそし上日は准后大将殿以下御

行道ありて御所にいてさせ給ふ散花は
いつれしも朝臣顕英朝臣公仲朝臣季平
朝臣敦冬朝臣雅氏朝臣資高資藤兼宣
重光なとなりき
同しき二日中日なり帝ことに心ことはしくる
かうくうよし覚しく一のいおはしめしけるとね
すつらの色の三の色の色百敷のうち一所まうて
まうく集りおいはしまそなり此居し立出帝
ありしてり申なにけいのわたりて石大将殿集
そもまのそのありさまなるしく珍しくめくこ
思しさせ給ふ御借の役人なとし侍従しみもえへ

帝も白いとにたかしろく二位殿よりしくて陣
のとにいけてむかへとてよのありき一日の事とし
准后は東房寺所経作せさせおはしますそとりて
もうわたり給ひしかり限ありねまたは堂
上堂下の人のまいる庭まてはまいるへくいうしそ
集りつゝねかへりてこれしして又つくん所ありさま也
出所ありさく人くさ花たちのあさ朝臣御簾
をまくとも白いは黄鐘調の調子をは吹いまたし散
花の人数たちのあさ朝臣つねしも朝臣季長朝
臣顕英朝臣公仲朝臣さね他の朝臣いまの椅
朝臣もれなる朝臣季平朝臣あきの平朝臣也

惣持の楽桃李花もまた破次てり伽陀又登楽
蓮華楽なりけり三寶禮の楽書春楽に序伽
陀又これのごとし敬持ぞんてり人々に礼拝
ありて楽書春楽の破又伽陀例のごとし六根
じんの楽は央宮楽河南浦平蛮楽なりて四物
また楽海青楽次てり行道ありて准右所屋
てりさつて給ふ出所ありて行道まいらし
き動のことし左衛門佐義将朝臣諸大名門々
をこゝろめゆるし庭上に色てり鬱囲のへゐ
てり奈和し偽つゝや散花にてゆるふし女房
うしにてふゆいかつもいとみゆし下楽拾翠

楽急廻白もまた楽鳥に急なり堂上堂下に楽人
勧日も同し但帥今出河の大納言よりて俊
大炊御門中納言笛てり筝の屋中に筝右衛
門督の局加賀の局今筝の局三人なりけるを
しこしもいへ法師のしぞこに腹まきしてく刀何
まゐほりて二番さねかけうしのやうなりしに二番
をうへよこのりきて南庭よりとをまをも
てぬかりうるを左衛門佐の舎弟伊予守義種
みなひそくらゆりかして免こらわし二番門前なり
二番若党をとめし二番思ひやりてりまたいさ後
手かゝり首ふとまたふそめいらつて従者盗すとき

の御遊しけるにや此伊豫守は武勇の名をえたる
人なりけれはにやかゝるかたへも名たかくけれはいと
先てそしらぬ様人なれとも中御かたにお軍を
ちんつめりぬるに何事も御存なり動衆いてや熾
法なり篳篥之人楽人なとめされてつねにも御遊
所乃養子てそ雅定にしたしかりける人の御
ありしよ主上御笛大納言殿笙御あはせ給ふにいつれ
もしくは篳篥をふかせし二番の人耳をおとろかす
されといふことしりしりやうの管絃の道あり
けるに至も秘曲の事織とて伝しへるなと
ていふ御秘

同三日夜に入てことはしまりける御遊出御は大納
言兼右大将殿以下めくると給ふの敬範
また役人たちの雅朝臣つね重朝臣公仲朝臣
むね敦春朝臣敦冬朝臣資ふ資茂なとよし
重光なりしとそ常の御所にてしらへ
の御酒宴あり御しやらん夜のまといふ二番
大将殿を出させ給ふ
同四日第六日なりし白き楽ありてはおなし
敬範まいる殿上人たちの雅朝臣つね重朝臣なと
の人々なりし
同五日三夜は結願なりしことにてさうらひける

こゝ申の時に右大将殿うせさせ給ふ先常
の御所にてありし事例なれは御古思そらくめく
まれけるは大将殿薨ありしをそてまいらせ
そまゐに金銀のたからをその前の絵に薨ある
二三百枚なともてもち及てねいしとてしいまいらせ
さやうなとしてなりし事それの首ありける
首よりもいまさら程なく薨ありしかは物は
はかりかたきことまことや應安ありし程なく
んすといふとなり仍建武ありしかたり薨
ありしとき事薨ありし事ある車をはくり
いつかれしのかたからのもとし仍中文女御

まとのあるよりも条して給はそれまはしかり
さりとも一統せし時分ありし事仍しこのことき
有様こそねまし薨ありしは程なくありし及仍
もいふはなきをみてなりしかのことなりしも先此程
御懺法ありし何候しそれる人々にわかちら給ふ
准后大将殿万里小路中納言ら我る御懺
法ありしはよしかは以中納言別当なと行り
その後左清つ作りしゆゑ頭弁を貫子ありしめ
されて御盃をとくさせ別当殿を也りし事
おほへありし事さ御ありし事座こそ移そくい例の時
ありしかりしありぬかくありし事そ仍し出御

又盤渉調乃調子なりとぞ又ハ侍従中納言卿
篤基をもさくおもひまいらせ次佛前秀長
朝臣准后をはしめまいらせ雅朝臣右大将殿
卿前ハ法印重朝臣修従中納言これまてハ云
仲朝臣頸中納言の前ハさねのぶ朝臣別當
まいらせてハ笙ハ信朝臣良憲僧正これまてハ季尹朝
臣長雅法印これまてハ雅氏朝臣房淳法印これ
まてハ知もとを良壽僧都これまてハこしろの敦冬
僧都これまてハ資国なりし心兼僧都調子作
らし総礼ハ樂宗明樂登樂採桑老の寶往
のうく蘇合ハ序敬礼乃そらん同三の帖六根

そらん又二らんのうちより當曲の調子ハ秘曲
なりとて同又ハ笛でう同破急なりとて但梅乃樂輪
臺青海波下樂白柱廻向千秋樂なりとぞ又
乃所作人ハ笙ハ了氏朝臣右兵衛督冷泉之経教
冬朝臣豊原盛秋同氏秋単兼兼国安倍季
村同季英笛ハ帥室町前宰相これハ雅朝臣ならび
らびの朝臣大神景房同景秀琵琶ハ園前宰
相筝ハ室町前宰相中将藤中了口張ハ近衛
局右衛門督局加賀今参り乃局羯鼓秀秋
太鼓ハ大神景長なりとぞ宵乃間し見やうて
そのうち二番系行はしらへを伽陀は都ゝ合

宵ハいとゞあつしくこゝちさへ悩ましく又御
修道ありし人数をもつゞけ年事のさまにて厳重
なり日出来し銀金をも死去しを勘なり
随て敬死の事ありしハいまさら長く備延しさ井
をしりて知らぬ身にてハ荒かに記れ
けり應安の例なりし年先年や懺法をこなひ
けれ年後ほと内裏の出御後ほどの内裏に
女房達二十人ばかりいろいろにきぬかさねて
うち年秀なりて東の方さしよせ舟ともり
そのほどさ同じくゆかしきこれの例ハ死去にて
あらましかばさ同じく知れぬ拾しく御ありし殿

上人なとハ死去折にて集りしなかしきにやさと
きゝもわれくそのなさしハ同さの御死七日こ
とゆへなく結願をさそわる事いとゆかしく
此ついでにとへハ右大将殿の御さるゝに
年ありしほとちやさしくゆかしの懺法しわ
いとのかなしかりし給く目をさとるかれます
のこ給しそのと秀いさらくの酒の御あそひ
いともとくさしあれしていさと詩くさくらけ
其同のりゆかしさくし宸筆の御八講ある
心のまなりし年南都へもひらく御らいしかしと
所後らゆく僧侶ありてさよ氏の家を称当し

帝嗷許ありて友ね異姓の上にあまくをところは
礼へりしところ有しを准后とさためさせ給ふ
なかにも大方春日の明神は法相擁護のためにあらはれ
り迹をたれ給ふ我をしさいはらくの上ふんの
一宗をもて氏の御こゝろとし給ふものから
神事神慮もいふにやおよはし給ふし居りや
うちくの御懺法ありなとく給ふよとも是は
世もひとめもしかるへきにてもあまた
以来ましく給ひてそれ人々あひ給ふし
同六日北の方は大将殿僧都をまいらせて此
かとは御精進してあまりし北の方の先

帝さへ渡らせおはしまして祝給ひしいとめてたし
猿破子五節のたくひなとやり笛吹なとて
ひらし給ひしやうん白もうつ舞ひのなみなと謡ひて
もいみしりの三四そたにはなく殿上人はあれこ
せまくはあへり十そありて祝給りける
ちかひは渡りし北の方は御まうりこいのあまた
僧都は物し大方主上は白膝大納言の御かん
まゐりて帝はまいらせ給ひとなりたまひしはくここ
ともはすみくはそなくましてせ事ありて
ふ給ひし日ちのちは法門なとて御かへり
せさせ給ひしまゝやすき日なりなとて今は御

ちんすと申いろいろハ別乃事なりとまりこハ首
まいらせしとよく御らんありしやうやりぬこと
も此前乃ことなり御しれりしみさ御
乃ゆめのし物としこくまつり申金はくり
まい御叙に小袖五十曜変臺ありきんらんこ緞
銀乃こ川具足唐絵こ幅御前乃ゆかんせそれかの
准后まいに前より白のねまいきこ香炉盆まそへ
手いろいろ乃小袖なとあり万里小路中納言
以中納言新以中納言別當冷泉こ位ちう
同さの胡行こそれ色く乃小袖とし担いつ女房
八御典侍殿新典侍殿勾當内侍右近内侍弁内侍

新内侍右衛門佐撰波加賀みな今参りなりと
まいり皆麝香乃臍いろいろの小袖とし数をつくし
又うはくしたる花ともしなんとしひや御ろに
やすくしてもうちそふるみなさ御いとおもしろし此前八七八
代九重乃にありさま御代ありなりしに
めくくめくよろこひしに此事にかはりて見えそ
同つかひくそ被仰し頭中納言別當帥
小袖とし去は御湯殿乃もと忠へ参り女官とし
まかなひやかうちゑかうちそへむしか
しいとおもしろく思ひ秋乃ころ人こかわ
御しとこ宵八出よし東竹乃音としおもしろく

さ国しくの御遊び給ひしはやあきらかに大将
殿出させ給ひまふしたりし千歳に一遇ともいふへき事
よろこひ給ひて此扇作のこやつこの功によりて
帝去年花の宴とおほしく殊に紅葉の錦を
ひきかさね給ひしさまにしのひあへりの心をく
代々の帝も何ごとも給ひしはかはりし此度をは
うれしからさる中にすすませ給ひまふしもしわさと
集りあひ給ひんやしさ国しく興行し営
神佛の志ろくへり希ごとのりしくされし
くおもひ給ひしはかなりしあやまちりや給ひ
むかしかの人のおもしろまへとかくこは出とりし

もろのよしあるよし御読せん人をあらはさるへし
心得り

愚問賢注序　　同

やまと歌の道は人ごとにあしきたれるに似て世挙
而詠するところて詠をなすに何をよむはまこと
こいへとしいまに桂林の一枝をも攀れまれ梅
やまはおもへしこいへるしつめるく崑山の片玉
をも拾はぬ羚羊角をとりけ飛鳥同をも古
賢の趣向趣に詠ずるく風雅の遺云求に於し
哀に於云もそしに七旬有餘の遐算を保てよく
三十一字の奥旨を弁へり久しく椿林の
ことをまつらふくゆく山道の玉道を尋ねし

けりに業の戸中に死ぬ後に優遊して去意の
職をうるをみすこゐより松山の月の下に吟嘯し
争妹兄のそりけるあしすらぬかれし遊次にし
うましは頼佈ありとしは連を道ありぬ宗ゐ
昔に似ありくことはこいふべしとおもふ学ありて志ある
人是ありて集をなしといへしとあり僕ゐ年の初
已なりて一道中に先年也清遊に宴を開こしは金
石のおもひりをかゐくし蒼海ありいふゐと
うゐよゐ白い鷗鷺の盟をもとしは冠なりまと
卯たこゐしのちもあかりけりこまに鶏いゐ
はしありて老の紋をゐまとをあゐおとゑつゐし

去の遊をしのむらしの事を語りて似たるを
一白宗眼の餘数ケ篇句をはぬなにまに
道意を含をむこうたる先祭くの批判を作し
のなりとらん桃志うしなりて連人中に用あり
あらは雅児の蒙を撃こなりと

都苞苴跋　同

僧宗久といふ人かつていひし一枝も花なりしそ
ぬさくれなゐを八雲の風よりうけてよまれの
あとさらむむる所なくに草に露ほすね
水にゆりせてなんまとしいありにしみよし
野にも花の雲ハ山のあなたをとかくなりしそれ
こむさしの月も錦も草にゆかりとやとゐ
すに三年ゆりしくうし修行ハ六十余州にこそう
のこる所なく三十一字の風情をたねなる
しあのりとまうといかしへかしこのうとし人も

あまれる行をしのひむかしの事をよろこひのへせ
らしあるは詩をこのむともからにまし〳〵てよ
やまとうたをこのむ人々をかくのことくあつめ
草庵にすゝ深山にても袖の中よりはこしきて
よろしいさしかん硯をとられしをむかしはえのか
ごりてりは文をしかうし筆をとらりてへ御りとを
剡渓の暁にも雪はのり月さしれ光をます
うちの友を尋ぬるはすこしもまちかあこか
積庵無には衣の苺はうかさしれしちん吟の
ものからとそくこそしらるさしとおへとも
いよ事あるし観應の院よりやつ人に仕へくるの

道はしまさしに御りくろかともみちぬくまか
すみ田の浪てりかうみまくれ名あり吉野山の
末ては思ひのと露をめくしとしなさしけおか
き草木の陰ては心ともの紫をこしにあれめ
千あ秋ものの松てりみあり秋とむかしと
こまつきを御り田としてりをみのかすそての
すひてりみあかりとしへともすなるにはくふ
嵐をしへとしはなさを御しけんとしすれは嗟
嘆ものらの詠さしにみえ波いさうか荒蕪の
ことの紫ときへ御みちしみのまなさ

白鷹記

同

凡鷹者瑶光之精氣をうけて金鐘然也増栄すりむまれしそのまゝ春鳩となるハ仁也秋殺をつかさどるハ義也食をとりてしかもさきをまづ祖をうやまふハ敬也誅をあはれり強をさらしむハ勇也遠をさとりて近くハ知也此五常を備へて彼衆呼を兼へそなへたり称物仁徳天皇の御宇野の御幸ありしより代々の帝交野禁野御狩侍宮田狩の之道遥絶こともし就中寛平宮瀧の

御幸勝負ハ御侍乃儀式北野ノ天神にられし
をもうしたまふ末代鷹ハ道乃亀鏡なる
なれや毎月左右の近衆木口ハこれにいれるを
そなへまいらする人ゆゑの曹司ニて数聯の良
鷹をかはれ数牙の逸犬をかぞへまつる毎
屋ハ大饗ニて上客料理をそなへしむ前
庭をはらはせられ諸国ハ侍の使ハ驛路の鈴
をならし三の羈粮ハ設けて催されしの
これより次野守乃鏡新をも尋ぬハ奥の
ハ道ニて関をしらぬとこよひも山乃秋の色を
そへと名ある京乃雪の詠をそへて秋てし

田猟ハ遊興を催されしといふ事なかりし作よ
古乃名鷹ハ天智天皇ハ磐手野守延喜
聖主の白兄鷹一條院乃鳩屋赤目みさこ京
ニて一條院ハ韓巻荻沢山蛾等也近江左
保とての奇鷹なりとも愛信法印称律の神平
なる所乃白鷹なる乃相鷹経ニて知らるへき乃こ
まつ次その毛雪しろく肉ニとこて楚国の
鵬をおとせる良鷹ニてしかるに次首頭白
綿のやうにまつろしく羽毛ハ斑綾をきせたる
ニて次そ首尾三尺よをよへつと遠くてハ羽毛
おかく近く三の羽毛もくれし前よりもの人

は腹のこゑして鳴羽翼をたゝくれは其声事物
にこゑしいふはかりなくして中にゆるく同
光明星に似たり眼かゝやきて人に對せ
めてらんな慈毛白糸のことし目の前のこそう
称あかくのうなみし鼻のあなひろくおほきに
くちはしうるはへつのと頭あはいく枝なく高めかい
このかたし眉なくゝして耳にそへりなと
かの毛なかくいよりの毛綾なとゝて然りて
うちんの毛うら羽ゆかし錦なしくかこうし
一の羽布しいかゝく二乃羽布しいつれしかく
あはい廣くして鳥なとくらいはあふれかうう

やうの毛なかくさ衣の毛白綿なとのこと然つゝ
羽翼速しとくとこの比しきりつとの骨おほか
うすもまあはりくなかく毛なかくしてそれかく乱て
額し尾はやうて稀にこれとくらんくゝ志ろし
なくいぬときれまさせよらけあしし羽石うち
しいひうち一枚よ毛こなせり腰をとこへやうに
し二本足大まうれ二本爪くろくうなかつのとのき
爪うち爪ごりをへうくろこ指なかく太さあり
惣して一羽乃吉相あんくのうやう古今そ
のよきもくわし又神術福能のもく記める
事能をくしいと南あへ須万人一読を望

緇素ハ眼を驚さしむといふ事なし誠ニ
かゝる玉の奇物他列の異翁なることやはある
今粗是を記しおけるのみ也

小夜寝覚　同

唐国にしもあれはあれ去にぬるはいにし我か風の人なる
昔よりも妹なりし心さしよるかたもなき色しきれは
光源氏もまた身にしむる秋の夕風とまうされ
給へり萬葉より代々の哥にもしみ此のことに
いはぬはなかりけれともいかなりし霞給ふこそあり
花鳥によれはあはれしりぬる事はよそに因
のほころひし花はすみれいへ秋のうれへもみそ
老の夕はまいて思はるゝ物かな月よ白ともよし
しらねと言はうしろ枯わたる荻の風をとしてきこえ

雁は羽風しらすなりけりなくる月みしゆく花
ねをきくやはしせなにありしかはしかれ給ふ
月に鈴は秋なつかしき春ゆくの移ろひしを
けりと丸ねのちか枕し所かれまくれる遠国
ほか暁かこゝせ世の事しねかはすれの哀し
おもいかわ次事はいつ我をへて人もはす月は
朝かほの露ちすみにありそもむ月をむし
の朝は命夕をまるせきのねかうし所せと
いはやしすいすはるからて百のよそひ
をのみかくひむらしと知かくねならとに
二すれそのし命よきていぬしいうらしいまる

しぬいふ事すはれさる先はかしむさかれまし人とゐ
すらるてもとき日そへてしる物のあるあち
ひ月そのしむゆへしれはくいはしてたまう
すはしねことをひ給ふし唐国にして文をまる
る詩を作つて酒をむし所とさかしの人
はくせ給ふとりや楽天といひし人を朝
夕ゆことをはくるせあるゆへよいとくさう
まうくよわひんのかこときるし也詩にしも
はくられし給ふ此おこされしそのゆことわすと
すれはのとこのむくせのたへ事すへりは
らせいまれしありとかしく栄ゆるや代々

まゐらすことゝやまとかなにうつしぬ義乃むねとさらに源
氏狭衣なとりぬものまさりしとてあなそらん物なる
事老乃やまとふみにすなはち物語へきやうき耕也
えらする畢とそ云乃あやしうはし廣
こゝろえらるゝ蛤まても貝ありこゝもと云物な
ほとの事なとにたかくしかゝる殺ハらもまいらぬ
あらはれり候とて世のれ肯ことくなんしるす事
もれし翊少人まいりてあまそひとあれなる二代
集乃中に云にいまさらあらうの得れ事
いおほくましまう日本紀萬葉集なとハ
いまさかれしもあなつうし世もまふえひもと歌四ゝ

乃境族ハらそていやしき民まても云葉とし云ふるひ
あらためる物なれハよみとく事つたへしかる
すゝしと照昭と云し人日本紀まて神代
よりと入哥乃心はうかれあけつし仏光といひ
しかの萬葉まても殺をえそ二百餘首順な
こふともよみとる跡をとくえ人物かり光
源氏をも光物といひし田舎人水原抄五十
巻をはくり爲首よりの雜筆としれはく
あやいせりされらの中ありしを云ふことまし
耕なすいあれと数寄乃人さらしは此世に
さりする事ありあり須佛神の御ハ寸

言にしよりて一道とはなりにけるにやおほよそ
御の哥はいやしき者なれとも名をあらはし
かくれ御門も御前に召しおさるゝ身に
あまの御はいけるしるしとそしかりける御代也
後鳥羽院後嵯峨院なとの御代ことに殊なり
そへてしかりしはかやうの事なれは道を
もれたること残れるにも此ためには哥
よむ人は中にして万葉はえせ事なりとまれ
かくて延喜の比よりはいとおほくなりけれ
ますや俊成定家為家なとしてよきとはるゝ
万葉をいまてあけりかくれなるにもさのみかゝり

の雪の夕葉苑のさかりとわすれ新古してなりと
いふ名哥此人々は萬葉よりこのかた積りつきされけれ
後鳥羽院も哥のあはれをしらせ給ふ事此集に
こもることに仰られしまれよりて源氏の物語なりと
をもいふ人のみなされは今そのえんある人にしられは
や紫式部か源氏白氏か文集をかりて
へせ事は知しられ後京極殿も仰られ
しかれし俊成卿も源氏見さる哥よみは口をしきと
そ判せし詞なりこのかみ御わかは狭衣の哥
を源氏なりけりとにいふとていふなりし哥は
詞も新しき物也みなよき物なれはこれ須

後院まて御記ありしをあつけし御らんハいかなる
事ありつるみかつきしまゐ連歌といふ事ハ古
よむ人もむかしハむしとにありけり是し伊勢のやかて
光仲の為氏卿ハ日なかりの上よりは庭上へ
はらハさしハ我身まて連歌まて名りてや人もは
くまてしもゆへつまて狂言やされけるをりゝ
や後鳥羽院まて御代ハよ此連歌の上よりとる
榜のありと此流と名付ゆゑるハ連歌とハ葉の
なかれ流と名付秋ゆきき榜のなの長者
たとゑともしてうの事を御らん同し此
御内と狀ハ物百のうけりのたりし定家卿ハ

四十にうけ秋ゆへとかぬ白記ありし御ろ為家卿し
鈴もそうけて八百葉しはくるハむけりしくらく
朝夕連歌をゆきとき秋けるとゑ寂し後
後嵯峨院まて御代ありハ弁内侍少将内侍なと
いひし女房まてまつ奇ハまいとくへく此
事なと御りここの名地下ありゆきに狂ことあり
まり秋菊ハとゝ世念なりつわさ也死まりとの詞
奇あわひそうハそう奇のやうりけるかり
あらく句なしせう秋御なる子細あれ同し
此ありつ奇の毒也とく一向ありもとくらゆ御の
事ハ昔ありハゆのひいそうの事にハ詩作の人

もし聯句極事なといまめかし何ともそ哥よ
みな連歌とハこれよりおこれるものなりけり和
作用ふし何の人へ出し口も心も得しくはあるまし
むへ人へもい連哥にうつし和歌の事やいふなるへき
さそしまつハ哥の判もの詞といふ事もすへて道
もし人乃なかなか事にそ和けられしもいとよみし
を覚し作の優婉微妙もし即時なとは當座
もし哥ありし判もの詞なく和せるものかしき、
為家の先後明らかなしふるしさもあり
物くとものかみ詞もなきとそへられしの此
比叢達ハ道もなきあるやはるとあしらそかや

すらう絶のかくなし是ハとなりけるかえし
あまりや虎生乃文をかいさうへらるもへて
判乃詞をは思ふまつりかゝのへらねかられ
事ありやさしれハ基幾すてハ詩作りもてあつき
しかハやにをよしれ後後定家為家のうちても
ひろく学問をとそ和かるへりて而和ハ云の判
し唐玉乃詞をかさるとゆりにとなさしてハ
かう和しのみハ歌道の事をそふそしるまとおもの
めあるせ道まそうてひ作の事のあるも和歌
判もの詞かく作くむしいなれあるかう出きて
とむ等ハ作もんしとなんかしなほりのあく

光ゆるたはらいてやよいるせらや先にしやはる
りのこおもしくせ老もん僻みよ侍ゆさるとゆる
まふふへとくわろあのうもゆるのしくさ光
ゆきされしとむらしよろとおのみをそれまれ
つあるとゝはやめこのこいかし伽ら在のこの
世のうしみとしてもむ世もん隙としたはゆる
なりとる牛ふもん馬獣のいあん求めいる
すまとあらう茶香のかし足らや来こ
ろい伊勢物ゆせい尋生しふ菜の玄くり
いあはあてかうこそとしあうもあらひとあ
ろこのこの数としたりん数しゆるへし

ぬまひ中の蛙あをそめしこそ宮殿楼閣
と思ひあらしむとつりせそいけりといね
馬の一羽よみ里とかけろしとれあんとそゆめ
たらうとなりるの二三寸と説しそうそれい
れし笑おきしまよのややせはん説とり
となくさめむまい満ことりふ是なくやう
もへ弟好むありきれりのいへそし御かたり
よりかなりの家のうちれとしけやあいそむとよ
そん其の児なしましてことひろく人たし
世としをもけ御の経の人ゆこれこいやし
御門ありとめいしせらく児ゆるもいとのい満る

うれしくもありしもおほかりけめこのこは物うく侍
る也中納言匡房卿なとゝいひし人くる
こ(ら)ぬ稀禄ありし事大臣の家もまゐりしはやし
たる人なりしかと後る天下の重宝となり
きは郷卿大納言は武家さはの事をもしる
らへりぬれゆくそうしひうまき言えと
いなしく人は賤く数なくせりのりて有し
かしし鎌倉の右大将は此れしりとせし制乱
日本国のひとひしるまかりて今の世よ
諸国地頭なしをかきとそうし此人まても
さしのりつしもる知御うしかやうなれ人を

さえり殺は事しなしとの物好の灌頂ありし事
もあるへきにさりあらし人ともしる事る茶香
のくさそうおもしろくりは様へつし須術ともしてよ
しあしきてやりそてわらはまへし事へ目とよ
人もあめしそれは国ことに大事ありて御う
すやさそこれむりしうりし人をさうてせ給ふ
御門とは聖主うしかしられ御代うてや〳〵
し人たちてせ給てや御時もみしかりけら
なる事の御うし大うなる信をうらまれま君
ありつれみをうらかへし又よさうれとも御なハ
なしつの上近し事下をも御らんせさせ事る

御國へはさることを殊にしとれかしめせとしたり
なほさる國の事なかれはよしとおほし先せ
ごとし賞さるゝ事になれてしかも御し先
まゐる人をとこのみかしこれをとりと先行くる
やかて人の善悪をわかつへきにもやかすの
鳥獣なとまでもあそふ人しその事になれし
毛物の吉悪を覚ゆへき神佛と神
ごの境界聖と聖とは一そ目のあ
そ世蓋をかくね三さて胸のうちのおもてく
まいるいとてりあるまし事せそてよの
開殺はむ人はおほしあしは世よいかく礼
なれものなりや二の目にみる所十の中にひに
さればこゝろあらしいかくれてそ御らんへし孟子
也といふ人はさとなれる右左の人はなにとも
とやむらしまるもあしけれとやうらしものゆへなり
すそる天下の人はおさまらし日よいふとりもちの
へしぶらかやそ御なりけりし物にもよしあしは
されの名誉なりよりの事とも世のをもまはあし
れ事もよくあらしとしてもあしくなるこ
らしあ私とし物のよきの誓古なりしもかくれ
せ物なりし唐國の文字しも和書の日記り
も穢さうといふことをあさましれ事にや

給ふなりとも白きを黒と白くなし給ふ、
蝿といふ虫の絵物なとにくらへしをしろくなし
うけたまはりぬるはなにとなく心よくしたまひけ
るもそとへ入り給ふことや成王にもさらしめて
むかうのし成王と申す御門こそ周公旦こそ
いさめし聖人の御ありさまにて国をもたせ給ひし
をあしき才の二人あり申す讒言せし礼
なり御門周公旦をとり出し申すに
うられしさき内裏雷風あらく世中にはやる
しける事業末もかきりしけるに綵の日の実
も猶くらしけるへ周公旦成王の父武王の命に

かつらむしといふ秘書を物の中よりもとめ出させ
給ひて是忠なりける人なりとてやうやうその
うへさられし事讒奏せしかの才二人をこそ誅せら
れ給ひし事は世に知れぬことく給ひし源氏の大
将の継母の悪后悪大臣なとのそねみにて須
磨へおもむかれ給ひし内雨風やまんとせしさゝ
かしく事知れぬことに知られし事は此周公旦の
例をとりしにかなひしかうのかくのことくいひし纪
女のさいはひしも光給はする知らせて書きしもの
し給ひし延喜の帝も時平の大臣の讒奏よ
りて小野の御事も出来し事也讒

倉の右大将殿の時に梶原景時か讒言によりて
あまたの人々損し候ひしかとも、やかてくハれ
後にハ景時もあさましく誅死して終りぬ
人もありし事を何ともわきまへす讒言して給の
とかや人々ときハなしひまて悲しくりぬ
きよらにてそのまちかひたる事ハ常にあり
なれとも其心もなく聞かせてはかくしこう
らことなかりし事はあさましく非道なりや
この道理なりとこそ云ふ事にてなさしは其
善事なりとしてもあるましくやかて出仕政
其後其心家仏神も御心ハしかなかりし

言すれハ聞ことにかくそかれ給へることもなかりしかやう
の事やかてきハめてなかれしも何ねまし
いましてこそ人毎にあるましき事也仏種
なすいかなるにもそれと知られハあやまちぬ
なれともしてかつとあきらかにしきしても人の
世のあらハ名利思ひもの事ハなし宝物をは
しく官位も私なけれと給はそれなつきて
なのにほふ人とにハ好むかしきこの事ハ常の
習なれハとそ聞えし非分のことを道理なり
いひそてそのかなりにはくりのなきよう
むはそらさるいふさる盗人なるかものハ我身一つ

争ハみだれし世をいきどほる事あるべし須つ
やすらかなる時は忽に国をほろぼし人を損し
彼へまとはれてよくしてその罪をさとらしめらるべきに
や世乃末ハ国としに欲ふかく名聞なき事
はあるまじきなれどもさにいふもしらひさうらん
人のさはりとの道なる事ハあるまじ　扨
浅深厚薄によりてハ御はからひに忠あるべからず然る
忠て仰られてまゐらぬ人の恩をたて候不義
アまたにあまる事の世に恩をしよいれば仰つ
あやまちとして君をとかくおもひけりとしく文を
あやまりの段の事はよしのつねにすなる事なれ

はやくに及さはよをかるかるしくそのまゝしかされ
ともかうやうそうひのこれ仍て仰つけや人かき恩を
思ひさりてさうらは馬鞍に労仰つるそうやうれハ
うはこそ念ひ候恩を報ぜむこまおほしく人に
しあるいふ思ひさりてさうらうもあるべし首韓信
といひし人もうしてハあさまにくまつらんかり
しかハ雖手をそて志かりこの浦人乃家へ行そ
つまそう人はらのすこ纜へやすらそて国しも
冬行しぞりかくにハ此韓信後よ所内よめ
しいぬさるれて国乃管領をしたまひて此海士の
家よ行て色この寶物をとらせて首乃仏

さしも報ぜむとすなるは賢人すなはち
まつしきをあはれむ巻なりしてすなはちか
千かねを漂母を報ずる為にはさう
に思ひけるとて實としもとられつ人し二分とう
さのよしすり韓信も一度のめてなしをとむく
ひくらしやさしくまさ賢人のひさしをも
纖りる難うぬめしにそやつるへさる一飯
をいのれしすむくみすといふ事いられなり
此比のやうは我身のれしこ利は手を
まりありもとりしてかのとやこと報をる
やうそあくる白すると候ることあるとをは

思ひ御ゐせ事いとひうれわさとなりをかりと
しうとふしあの世にあるれさるる人なりとは候
事あるかよりたりし人とうなるへしとせと
の依もいうしくをかうとねまいかにの事
始るいはしむさくおう事ますて細りやう虞
舜も始は民てりとう有しるの所同の位よりうう
帝後しるそくりとの民のとは失へともとを
もさくこ人をいしもすれ秋やもやはらうてあや
うれをと云れせうこそすよ御れ當時の人まで
やうてもとうりとれ御あへいう人傍りくをとも
すくれは御ま大方ぼ国てもとも大臣公な

こそ御ゆかりと申せとも位ありあらそ禄の品
社はその法とさえて朔望なしとそある事
いましもとふをもしれるのは必すかしこ申根
よりこそ花枝葉かちきりたる事は常にかわらぬ事
とや御まへいかよふへ申上よ下の国さうる事御ゐ
ましき事なりやいくつしもとや若きた事御まへ
らしまつさしなうにまいこなれらりもて御ゐるそし
又ありろくの道をとふくいあさうらあれるなり
男は伴のほとし稽古を学なうむし人の情をいの
すりとかいうやう清浄なり申験をてしうたとか
らむ人そのほかは詩歌管絃なりいうりまてとし

道乃懐紙なりし人々と国へとしのめくこねのへ
それよやさうそしふ人は稽古をとしみなりなし
詩歌も道花たらの事まて御まへ御へくし人乃
よしあしはいかなりとさるめやへこよりと
ろかなうこてろりいとれよへかめく御まへと
唐乃文五経三史なりとくとくし絶えとし申
要人としのれとられぬう物なりいふもし人の
よしあしもとをとらりてもとしへ御るうや今さ
ら事なるそりしそれ事なれとかの文なと
をたえさうむし人乃そをめくるあうて女房たさね
こ人なともいぬめりや御らしまる人のなりとは

聖人なりや是は獣なりされハ麒麟ある
時ハ鳳凰の出るとすなハち世に出なす
のかくかくといはるゝ人しあるましくなるらく
こゝろやすくにやてもしをもむきなし堯舜禹殷湯
文王武王周公旦孔子なとしかしなからハあさく
きゝ聖人と世よりしゆるし人もて用ける事なけ
我ハいふそのなきの云葉にしてこゝろやへたにあらを
我国にも聖徳太子大師ハちかなりしとやさしや
へかしむ此聖人とや猶の人を第のけなる事
なくて天地とひとしきを云ふとなくして日月と並ふと
なるへきその猶の事なれハ心もなくやにも及ハ候

その尊常はまくの賢人く君子のみ際ちとこそ
よろしく人とはや候らへ先それにしに今はあまし
きゝ不二念よりも見てくし候ハし賢人ハなと只絶とある
猶の人にも又あり我身とゝふ物とも思ひしますか
数へうしく候ふとゝへりしゆの乃そあにはしくハ
うらそのまゝをまことに小人を助ける事なりし又しハ
し記まよのとし二乗のあらし記事ならへしからさる事
しまくうらこしよもしをてよしなこらハしかく候
事もあるましきせその道理必といふまし
云とふもといふことの儀頗見なきつるよすへし
世ハさりぬ人けめくむせ君ハあやな

親をうやまひ兄弟の道をたゝしくし朋友
の礼をみだらず次にはうそをいはずあしき
ともをすて忠あるものを貴し科あるものを
罷さしむそれその分際によりて施し名利
をこのまず財宝をむさぼらずかくし出る
なきものは賢人君子也金玉の類を脱事
なしかやうなる人を賢者とも君子ともいふ
いふ仰の人こそや上は経にも書にも今も
世には道あることもしまれなるものつね
の人はおもちと佛神をもしらずして
助けなのこ我才をはかれども…

身もよきはすたれり人の道理をしる
ことをさるとして和の道をしもとめ今の世
ありさま道をしる人しやこゝに天分之皇の
代ありし王道もくだり中古はよきを人
まさりし中古よりくだりて人いやしくなる末の世に
さまらいか人のそれあるへしとは居の久り
しかれともかやうにもちのこありゆへをもって人伴ふに
とのありゆゑにとおりて仰をもつて政よろしく
国もおさまり内もよきにすへてめでたし
さらなる事のあるへきことは五百年かうり
つきし聖人もあって仰のつかさや撃をもつは

私ゟ内よりあひ給ふからやうす覚ゆるもの也
学はおしくて唐大和の事をわきまへ
人もあらはれよしてものゝかくれまではある国
しれありぬをとゝひなにもせつて世人して
あつかしきものはかりの道理をさとりぬるをも
す学文をいふものこゝにゝへ仕つかまつり大学の
ごとく道理ありてもきこえもしたるものゝ人々を
して学文をせざるこれにても孔子の教へ作ら
我よしれ小笠内政よりまで九代のかゝる事
しまへ二年老学の所作の秋ふる事はありまた
しまやもりかけて貞観政要は武備なと

いよ物かたりをも覚えし二年秘すべきことあひ給ひし
程もすへて世もしゆかりて国しめてつくりて
給ふしもりの大家の中をわきまへ給ふ
む事にも又やすかりなるし二年目なる
国ある事をも覚えし給ひしも程なる事を国
こともある人の心へやすくて擾乱へうにあらぬ
我もかゝるしといふ事をゆるしさらくと
あるてかゝるひとのよしあれとも古き人々を
かくされぬる人のうちには練習して常
ありけるは事をも御かの人のありける御かは
しめて心れ事まて御かの也業なるにこの我れ

ごとし常に身をそこなふ毒をはまぬかれし
後には病をなをしぬかしこれ帝は
よろつ諫言を聞ていその人を賞し給て賞翫
ありしやされはこそ此その人〻はいかてかよ
う事なれとも我人のためよき事をはかる
しこゝろもちいる事なれとも我人よかれよ
まねとはよしこゝろ得へしかやすからむいさ
めこといふそうらふなりて国かせていふことを好
みてもすへて国のゆめしそのちうしあらへう
を誠に和らけむ人の君の御心得しを
ゆく二心なく御ためにのゝ事や出に

世のそしりをうけとなり御心にかなふ人を御〻く
くはへおほしめせこそ人の心はいかにもならせて
ゆるまじきなれとも御心ひとつにしてはあめ
心やすくれ徳によりてなほ政をしてもつてせ
世のひともありをおもふへき事なれとも堯
ことに御門にも舜をもおもしいましてはまた
萬の事をも好み給はせて正徳心及び和て後
天下の政をはありけれとさけしも聖人
徳うたれましまして世のつねの人のやうにて
よしあしを御らむしわけさせ給ふ事はあ
るまじきなれとも人〻は穏便にて天下の利根

すへて人もむかしの今にならんや世の中のおもき人
のそむへしよく道へきことおほし何の身も国
のまつりことは事も何の時のやうにちと
女のなさけあるを人の心へし人の方女也といふ
ものゝわかれ内の親しきの心よくするを
今は夫にさきたち老ていまにまよりの物
我まゝの行をそむねさせ身の知を伊勢の
経をやうにありなしにそのかいよく何の
ますや人のみの此日本国は和国とて女のれ
ときたる人へらまほり天照太神も女神よ
今はわかせ給ふ人へ神功皇后也や何か

しは八幡大菩薩も御母にて今の世の中のせ給
物なりし新羅百済をせめたまひしも今
此まつりの国をたいらけ給ひし也さて其
鎌倉の右大将の北の方尼二位殿なと二代
将軍も母にて今大将の後をなとへて鎌倉
を政を行ひ世は乱しく成敗なしけるは
承久の乱にも内をも此二位殿の御はかりて
つかひ義時を諸大名にも下知させ世を治めし
くらそころはの中のへうにありしは昔は女神
の御内もかしこくわかりせ給ふ事の其ことは
たはかく仰しの今も国のことにかしこからん人

のかんは世にしたかひてこそすゑよへらる事也
又男女の事まいるなるの事也しハ源
氏ありし御事なりや御わけハ今の文やありけるよ
いせ事也当家の先達御かたハいめんとくたり御の
色しられしもいたさ御ひとつ人々とかハへと
うしろもいめてはゝ御としのよしへとしても御の
へきれとくれしくか秘事なれともあなる男も女も
うゐるしかゝす正直なり道理をしらさるらん
あはれは何事もいかゝあるへきなり御の
身やたやうそこなる人の一さいの見えりんを
よしへうちいふとるやや損なり業の事ハ道

理をいふ文字なりしにかりそせて御のもとそ慈鎮和
尚こそ人のかうをうれし御のいとる難きこと事
也今やうの事はされりしこし文らしてかりね
をかならんにうれるし御のまに卿も私ものも云
業なるいも又しへんそらしてそ世にかうの事なる
頼事の由のやう弓矢のみの人はゆめとよ
事のうつく御の人へいこゝろ取りし兼父の
みゝれの因院宣申所うけ文をりしも武る
御をに[illegible]義時朝臣をかく
秘し府国なりしを盟こそ二帝牛の血をとの
こて紀請をまいらせてやうてり契約をして也今もし
よ

一揆なりてかやうなりつるとよや大かたの君子ゝ
は仇を後とてよろしき人の黨をむすひける事
あまりに過にたり唐國にも王ぬこそあれしはゝ
しかるを牛乃血をすゝりしためしもあるにや三
皇五帝なとの世にはいかの事もあらし
にあれて後のそしり人々のことありき争私
の一きなりとはうるにあらよりし事なれ小人
にもをもうくろこと乃あり川よりとてい
をそそくはれ事もとやや多りとなりとそる
事は逆くあしきにとなりと盟とや何
もそろ合戦乃内にわさこならあれしは今

しさやうの時は一きともありぬ庵さ
事也何しかの事もうれ内私乃録約
は論すれ事なきはゆる標近江波風
さそうしかしてあさうの志まのから今も
人ま國まそてぬあうしこそあれとさう人相
相内ありなり也彼漢高三尺ましはうれとも
是ありはまつしごとく覚ゆる末乃世には今
の内をこふまのめ絶えくそれ人め絶しまとむ
き何んへまれしるいよくかしこれ御政し
あれのしと老ままあまりしにいし何かい
何まのさへ何りとる也乃やまりけりし失し
し

ちてもなれ事なや御乃也小安乃移さめし
てり思のこさむれしくなあらけうまむ地乃
かもうなりつ国てりれうのもくかうこ侍け御乃
なりし

菟玖波集序

同

大和ことの葉は天地ひらけしよりおこ
りて千早振神代にはまだしかりしといへども
人のよとなりてすなほにくそ句をとゝのへ文字の
かずさだまりける後そのさま風賦比興雅頌の六くさを
わかち長短旋頭混本のさかひをもわかちて定
めしよりこのかた家の歌をしのびおもひの
露をのこさずといふ事なし然るに連
歌はそのかみよりおこりてはじめとして文の道よ
わかる歌のさかひにわかれて日本武尊の

夷乃みつきをやつして宇きくはくる枝乃ふと
しきしまをあつめし中納言家持卿
さか川よむあまた浅からしせひとのへ業平朝臣
いまの坂乃関にも情とゝめ天暦また御門は
滋野内侍にみことのつきにぬこし小野天神ハ
西国乃御戸のゆくへゆくさむくしむかしもまたいひかなし
このよろしきこれのか雁乃玉つさ書つく枝あり
のちに枝乃あらはしもとめてりはなしに
宇き拝く形かりくあわれいふ子紀をもち
月を給ゆかこをおかす給くしも詠も
季下りにし云何まこなの句下りあつし

毛のあるはよき意路にりあたしもあつうなり
らみむとへいふ神とうやまひ仏をあかなれ
こしあかしすや国とりとろしのへはくのせ
そうのまゝくことを独ろくそのむかしよりあし次
どいふ事なるしをつりうかゝ聖かれハ代ゝの
おしつきの御門も撰集にくらへ家ゝの道を
えさうへて式目をはくつしても人ことにきこゆり
庵乃なくあそひ苑まいりしのをそよみ秋ねで
あなかり月よういせをゆかしく流りてあさけからしてか
旅乃名もさらえんゆかりとそくひくれ行ゆかくに
そらしすこし独しし伊勢乃海のすゞかのそひ

ろひあへゆうつゝぬ絶しもとむすく和哥の浦
の藻しほ草かきつもる跡またはなむなき
ものなりと今苑殿風おさまりて御営議あ
まねくし玉ふ事絶ぬ下の萬木よりの絶く
みて人あへものくひちおつせても絶れことて
のすゝむくちらすれなきけれとこのしかある
あれしと筆を乃こそ詩歌のうち文をし次と
武をやつし民を教ふるなかうち心して
かしこきとろのゆゑにとをてすなはち伊や
しきをわかすおもひをのゆることてあり村つ
ましく風も情をよはゆることしてなく議

まこと葉のみちはなかゝはき木かくれしものゝまとはし
ちりうせよみ人のはしめにゆかるゝあまりのあれ
いかゝ何事をくたかしもいひつゝして道なり物うるはしれ
ゆさしにそむへをはたかりあけめて荒玖波集
といひ袖のせいよしへいいゆらすかうしりの
をはへ絶すとへものも教ふいちうてりなよれ
つもとのなかゝのけりをひへつきこ後の乃あさ
ちりもちつかいへしまて絶えゝうしけら
ことにあらきり九あり乃葉のあゝことあら
よすかせて風もはやくもとなく難波のよう
あしさうて絶つう榊しもおはりもして

須まは両三人してくちかしこハ、両なるひあつ
然るうへはその系甚数をくわし両ことに
彼をとりて天津室をとりてひ暴豊をとりて々
こけ海をとしかゝむかふとしもあしかれも
此事ともあまく代々てりぬこしなからんこそ
うけるちかしなりちのいやしきふとしまさ此両
はうてもまてしきこうしあこすそしかうしるすをも
うけるよてとしみをれつしあまきへりしこう
えことぬのとりすまへらうふれしをれつら君
とほと称をと合あみてりあへる殊をゆかうと
いよ物し干時文和五年三月廿五日なりん

ちうしをつゝしわかこゝをとふふそけるいちう
をいやしくもあるひいかし庵をちかひ作
両ふりそけといへしはくその道をそつねさは
河乃こふれかるふちのよくあるれをうけよとい
ねことちうる

国立公文書館
National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan